

浅草・本龍寺の鏝絵、田村恵稔の作と判明 鏝絵名人の遺功、大手新聞2紙が報じる

作者不明とされていた東京・浅草の本龍寺(台東区今戸1-6-18)にある鏝絵が、東京の下町で活躍した左官職人・田村恵稔(本名・守雄、1892~1962)の作によるものと複数の証言により判明。6月19日付けの東京新聞、7月21日付けの朝日新聞(静岡版)でも報じられた。

本龍寺の鏝絵は、内陣正面の欄間に菩薩や天女が左右に配置され、中央に本尊の阿弥陀如来が納まるように計算され、来迎図を表している。また、内陣左右の欄間にはそれぞれ松と桐に止まった鳳凰、手前の横柱には鳳凰を中心としてスズメやコイ、マゴイなど13体の動物が飾られている。

東京の埋もれた鏝絵を探し歩く新宿区在住の調海明さん(62)が偶然見出し、その芸術性の高さを評価。住職の本多弘之さん(71)の願いもあり、3月3日に江東区で「鏝絵のある街展」(本誌4月号既報)を開き、作者を呼びかけた。同展を訪れた小社の記者を通じて、かつて田村の愛弟子であったミヤビ工芸・大久保雅一さん(78)に到達した。

6月に鏝絵を教えている弟子たちとともに本龍寺を訪れた大久保さんは、光輪の特徴や菩薩の表情に伊東深水の美人画の影響が見られることから「田村先生の作品に間違いはない」と話している。また、田村からかつて手ほどきを受けた足立区の元左官職人・荒井康嗣さん(73)の「本龍寺の鏝絵の仕事を手伝った」との証言もある。

田村恵稔は、群馬県中之条町出身。



師の作を見上げる大久保雅一さん(左)と、お弟子さん達

大久保さんによれば、関東大震災前に東京・本所(現墨田区)に住み、左官職人の父・^{じゅざん}嬌山とともに仕事をしてきた。田村嬌山は、旧安田善次郎邸を手掛けるなど、多くの文化人にも認められた優秀な職人として知られていた。恵稔はこの父に師事し、その技術を継承している。1931年には、左

官職から鏝絵専門の作家に転身し、筆を用いず鏝のみによる鏝絵制作、日本画を参考にした手法で人気を博した。戦後、台東区今戸で大勢の生徒を抱え、車座になって職人に鏝絵を教えることもあった。故・杉山三郎元日左連会長が花鳥風月や山水の鏝絵を購入するなど、業界からの信頼も厚かった。かつて、その作品は旧・日左連会館にも飾られていたが、作品の多くは戦災で焼



菩薩の表情に伊東深水の美人画の影響が見られる。

失、散逸し、今や業界でも田村を知る人は多くはない。

亡き師匠の遺志を受け継ぎ、自らも筆を用いない鏝絵制作を追求する大久保さんは、日本画に影響を受けた田村の技法を「朦朧体」として発展させた。「水のように無理のない曲線が美しい。桁違いにすごい」と大久保さんは、弟子たちとともに感慨深そうに師の作品を眺めていた。